THE SUISHI-NEWS

R5 漁期のトラフグはえ縄漁をふりかえって

R5 漁期(今期)のトラフグはえ縄漁は昨年 10 月から今年 2 月までに 15 回出漁し、漁期を通して平年を上回る水揚げがあったことから、総漁獲量は39.1 トンと好調でした(図1)。漁業者の高齢化などにより、はえ縄の出漁隻数は減少傾向にありますが、今期の CPUE(一隻一日あたりの漁獲尾数)は69.5 尾/隻・日となり、平成 15 年以降で最も高い値となりました(図2)。トラフグの資源状態が向上している理由の一つとして、漁業者による小型魚の再放流等の自主的な資源管理や、毎年継続しているトラフグの種苗放流があります。

一方、単価は需要が高まる 12 月にやや上昇しましたが、漁期を通して低い傾向にありました(図1)。 平年に比べ単価が低かったのは、暖冬による需要の減少、他地域におけるトラフグの豊漁、養殖魚の安定供給などが原因と考えられます。

また、本県で漁獲されるトラフグは、伊勢・三河湾系群に属し、本県の他に三重県や静岡県で漁獲されていますが、その生態には不明な点が多く存在します。水産試験場ではトラフグの回遊生態を把握するため、2月10日に遠州灘において、23cm~47cmのトラフグ226尾に標識タグを付けて放流しました(図3)。今後、この標識魚が各地で採捕されれば、トラフグの生態を解明する手がかりになり、より効果的な資源管理に繋がることが期待されます。今後も資源管理と栽培漁業の両輪で、トラフグ資源の維持・増大を図っていきます。

漁業生産研究所 海洋資源グループ

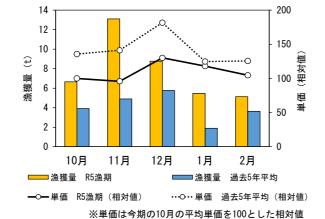


図1 はえ縄漁の漁獲量と単価の推

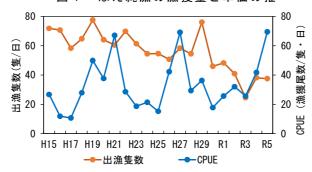


図2 出漁隻数と CPUE の推移



図3 放流した標識トラフグ

豊川におけるアユ流下仔魚の状況

内水面漁業研究所 冷水魚養殖グループ

アユは秋に産卵し、ふ化後すぐに川を下り、冬から春まで海で成長して、春になると豊川を始めとする県内の河川に遡上してきます。当グループでは豊川下流域で、産卵・ふ化後に川を下る仔魚(流下仔魚)の調査をしています。今期は 10 月上旬に河川水温が産卵・ふ化適温の上限である 20℃を下回ったため、産卵・ふ化が促されて 10 月からふ化仔魚が多く出現していました(図4)。流下仔魚のピークは例年とほぼ同時期の 11 月に見られ、当グループと国交省中部地方整備局豊橋河川事務所の調査結果を合わせた流下仔魚総数は 23.3 億尾と推定され、過去最多の出現数でした(図5)。

昨年春の遡上アユ数が、調査開始以来、最高であったことから(令和5年6月水試ニュース563号)、秋の流下仔魚数が調査開始以来、最高になったと推察されます。今年の流下仔魚の海での生き残りが多ければ、昨

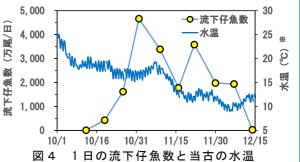


図4 1日の流下仔魚数と当古の水温 (※豊川下流域(当古)の水質観測所のデータ)

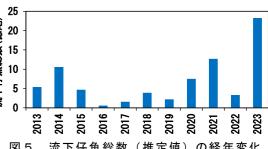


図 5 流下仔魚総数(推定値)の経年変化

年に続き今年も多くの遡上アユが期待できます。河川漁業においてアユは重要な魚種であることから、 今後も天然アユ資源の把握を継続していきます。

クロダイは何を食べているのか

愛知県内のノリ養殖漁場ではクロダイによる食害が問題となっています。クロダイは冬季に動物食性から植物食性に変化し、そのことがノリ食害の要因になっているとの指摘があります。そこで、当グループではノリ漁期において、ノリ漁場で捕獲されたクロダイと、沖合で漁獲されたクロダイについて、消化管内容生物の経時変化について調べました。

図6は、ノリ漁場で捕獲された8個体と、伊勢湾、三河湾、渥美外海の沖合で漁獲された29個体の消化管内容生物の出現頻度割合です。ノリ漁場で捕獲された個体については一部を除き、内容生物はノリのみ確認されました。一方、沖合で漁獲された個体をみると、一部を除き、内容生物は甲殻類、多毛類、二枚貝類、巻貝類であり、経時的な変化は認められませんでした。このよう



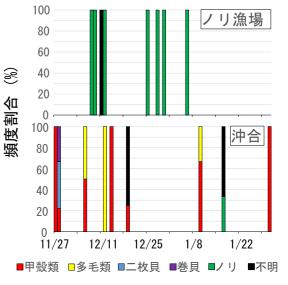


図 6 消化管内容生物の出現頻度割合

に、冬季、クロダイはノリ漁場ではノリを専門に食べていましたが、すべての個体が植物食性に変化するわけではないことが分かりました。今後も、効果的な食害対策のために調査を進めていきます。

https://www.pref.aichi.jp/suisanshiken/





弥富指導所